二等室の思出

私達は多く皆町屋の娘で、そしてその時はたしか小學校の高等二年生でした。尋常一年から四年の半頃まで受け持つてくれた翠山先生が、罪のない愛惜の涙に送られて旅立つてから三年は過ぎ、その年の夏ひよつこりと、誰に何の豫報もなしに臺灣から歸つて來られたのです。先生の姿は大分變つてゐました。まつ白な洋服に巡査のやうに長い劍を下げ、薄緑の裏を持つたヘルメツトをかぶり、新に薄く天神鬚などもはやしてゐました。先生はその時分まだ開拓の緒にあつた臺灣へ、新小國民の教育者として赴任されたのでした。

何の爲に先生が突然歸つて來られたか、私達は一向知りませんでしたが、なつかしい先生がこの町に入られたのを見たといふ一人の知らせを聞くと、右から左へ良ひ傳へて、私達は早速その宿へ押しかけてゆきました。三年前の田舍教師であつた先生は、その時さうした見なれぬ服裝をして、親戚の家から宿へ歸られたところでしたが、私達の姿を見ると、

『やつ！　きんちやんか。』と、まつ先に私に目をつけ、嬉しさうににこにこしながら『みんな大きくなつたなあ。』と、感嘆するやうに言ひました。

『みんなまだこれつぱかちだつたつけのに。』と、先生は更に手でもつて地上に低く私達の背丈を拵へながら。

全く私達は皆もう前髪を上げて、幼顔を漸く整へかけてゐました。

先生はこの日、町から四五里奥まつた田舍の實家に歸られる豫定で、百姓の兄さんと、親戚の者とが迎へに來合して居り、一まづ宿の拂をすましたやうすでしたが、田舍者の事とてお茶代などに氣が付かないでゐるのを聞くと、先生は一寸困つたといふやうな厭な顏をして、通りがかりの女中を呼ぶと、私達の目にはまことに大枚だと思はれるお金を帳場に屆けさせました。兄さん達はあきれたやうな顏をしてそれを見てゐました。

それから二日ばかりして、先生はまた町に出て來ました。そして前の宿に逗留して、そこで婚禮をされるといふことを私達は聞き知りました。つまり先生は、久々でなつかしい故國を見舞ふと共に、結婚の爲にはるばる歸國されたのでした。一日は私達昔の敎子を、今の受持敎師と共に一人殘らず公園の茶帝に招んで御馳走をした上、めいめいに小野鵞堂の習字手本をお土産に配り、記念の

撮影をして、その寫眞も一枚づつみんなに分ちました。

物堅い町人の私達が親達は、その好意を喜びながら、『先生は大分お金を殘したものと見える。臺灣といふ所は餘程お金が取れる土地なのだらう。』と、目をそばめあひました。田舍人の義理堅く、私達はめいめい親達の整へてくれたそれぞれな品物をもつて、先生の宿へお禮に參りました。先生にとつては却つてそんなこまこました田舍じみた贈物が迷惑だつたかも知れません。何しろ町に取つては一流の宿屋でしたが、高が元小學校の一教員を大事に待遇するところを見ると、先生もお金は餘程持つて居られるものと見えます。私達はいろいろ臺灣の素朴な土人の風俗や、その他の珍しい話をいつぱい頭に溜めて、歸る時には又お茶菓子を澤山紙に包んで貰つたのでした。

一二日過ぎると、誰からともなしに、今夜は先生が、あの宿屋でお婚禮をするのだといふ事を私達は知りました。そして言ひ合したやうに、みんなその二日ばかりは宿屋を訪ねませんでした。

するうちに、いよいよ先生はこの町を去られる事になりましたので、私達は受持の先生に願つて、學校を早仕舞にし、急いで家にかへると着物を着更へて、町はづれの停車場さして駈けつけました。その二三日前から、私は友達をかたらつて、いよいよ先生が立たれる時には、Y——といふ次の停車場まで見送る事にきめて置きました。

さて停車場に行つて見ると、先生はもう既に來て居られて、形ばかりの小さな一二等待合室にゐられるのを見受けました。そのそばにはこゝらに見なれぬ一人の婦人が俛いて腰掛けてゐました。私達は物陰に行つて、ひそひそと、あれが先生の奥さんだらうと言ひ合ひましたが、先生は別に私達にその新夫人を引き合さうとはなさいませんでした。それよりも早速私達に問題になつたのは、二先生が二等の切符で行かれるか、或は三等を買はれるかといふ事でした。その時分の私達には、二等の汽車で旅をするといふやうな事は、非常に贅澤な事に思へてゐたのです。然し結局先生は二等に違ないといふ事になつて、私達は親から三等の割で貰つて來た汽車賃に不足を生じました。で、家に近いものは再び親達に相談に行つたり、また少し澤山持つてゐた人から借合つこなどをして、貧しい故と、繼母の故とで仲間入のできぬ氣の毒な二人の友達を除き、十人餘の者は、出札口に寄つてたかつて次の驛までの青い切符を買ひました。その時はもう先生を送るといふ趣意も忘れ、二等室に乘れるといふ新なる喜が私達の心を滿して居りました。

その混雜のうちに列車は構内に入つて來ました。私達は慌てゝ改札口に押し寄せ、先生が既に座を占めして居られる車室を目がけてどやどやと入り込みました。

『どうするの、どうするの？』と、先生はびつくりして聲をかけました。先生は私達が次の驛まで

の切符を持つてゐる事を知らなかつたのです。私は手の平を開けてその青い切符を見せ、

『Y――まで參ります。』と言ひました。

『私を送つて？』

先生の顏はみるみる困惑に曇りました。それは物堅い私等の親達に對する氣の毒さと、同車中の一人の客の手前をかねる思と、この罪のない群の中に、自分の新しい妻の位置をどう置いたらいゝかに惑はれたのではなかつたでせうか？

全く乘り合した一人の客こそはいゝ迷惑だつたでせう。二等も何もあつたものではありません。小さな車室に、それだけの人數が乘り込んだのですから、私達の二三人は腰をおろす席もなくて、立つてゐる有樣でした。腕を拱いて、曇つた顏で私達を眺めてゐる先生の側に、身の置所もなささうに遠慮つぽく腰掛けてゐる新夫人は、兩手をきちんと膝の上に重ねたまゝ、絶えず俛いてゐるのでした。

汽車は動き出して、松や杉のしげり、或は靑々とした田の面が、次々と窓外を走つて去つても、一人の乘客の苦い顏と、先生の曇つた顏と、新夫人の沈默とによつて、車内は至つて白けて見えました。殊に黑雲のやうな先生の顏の曇が私達を悲觀させました。私達ははじめ一所の車室で、親し

く先生とわかれの言葉を取り交されるものと樂しんでゐたのでしたのに、どこまで行つても先生は口を開かうとされません。何か咽喉もとにこだはつたものでもあるやうに、ちよいちよい氣になつて振り向く私の顏を、にこりともせずに眺めるのでした。それに、『奧さんは泣いてゐるのではないかしら？』といふ考が非常に私を心配させました。

今まで見も聞きもしなかつた人と、見知らぬ土地で結婚し、その不安なをののきのうちに、更に知らぬ他國に運ばれて行く女の心持を、今のやうにまざまざ思ひやる事は出來ませんでしたが、何とは知らず泣きたいのをこらへてゐるその心持が、廣い廣い未知の世界をもつ少女達の胸にも傳つて來るやうな氣がするのでした。

『あ、お祭！』と、誰かゞ突然叫びました。

窓の際にゐた人達は勿論、何事にも大袈裟な好奇心を持つ子供の常として、他の側にゐた者も折り重つて窓の外をのぞきました。青い波の揺れてゐる畦道を、折詰を手拭にくゝして下げた村の人達が、ちらほら通つてゐました。村の人家が見えるあたりの、一つの森をなしたところに、白い旗幟がちらちら見えます。なるほど村の祭らしいのでした。さうしたなんでもない事にも一々興味の目をみはつて、私達はそろそろ暗い氣づまりな車室の空氣から、窓外の新緑の世界に心を放ち出し

ました。目まるぐるしく送り迎へる新しい景色さへ見て居れば、列車の進行はいかにも快い動揺を體に傳へます。

『汽笛一聲新橋を……』

やがてその輕い動揺にうながされたやうに、誰かゞ唄ひ出しました。

『はや吾が汽車は離れたり……』

二人三人、誘はれるともなしに誘はれて唄ひ合せると、次の瞬間にはもう私達のあらゆる者はその唱歌に合せてゐるのでした。野山を分けて進んで行く汽車の響が、時には轟々と轟いて、私達の幼い合唱を奪はうとすると、私達は一層聲を張りあげてその響に勝たうとしました。私達は今先生を送つてゐるのだといふ事も、またその暗い顔をも、沈默の婦人をも忘れたやうに見えました。快い動揺と共に走り廻る野と山の間に私達の心は遊離しました。

間もなくY——驛の人家が遙に見えて來ると、私達はいつとなしにその合唱をやめて、今更のやうに先生の顏色を窺ふのでした。先生の眉は依然として曇つてゐましたが、併し氣のせいかその暗さは晴れ、たゞいかにも打ち沈んでゐる人のやうに見えました。

『や、皆さんありがたう。お家にかへつたらようくお父さん達に私が宜しく申したと申し上げて下

さい。』

先生は立ち上つてから言ひました。これがＳ――驛からＹ――驛迄の間に聞かれた唯一度の言葉でした。

私達はぞろぞろと狭い車室を出て、プラツトフオームに並びながら、先生が窓から首を出すのを待つてゐました。

『もしもし、君！』

先生はその白い半身を窓から出すと、改札口の前に立つてゐた助役をさし招ぎました。

『すぐ次の汽車でこの子達を二等に乘せてＳ――驛まで歸して下さい。』

さう言つて五十錢銀貨を四五枚助役の手に渡しました。

『どうぞお願します。日が暮れないうちに着けるでせうね？』さうして私達に、『遊んでゐないで、すぐ次ので歸るんですよ、でないとお母さんたちが心配なさるから……ぢやさやうなら、みんな達者で御勉強なさい！』

『御機嫌よう！』

『左様なら！　先生！』

『左様なら！』

新なる涙が私達の目を濡しました。それは最も安價に似て、決して安價ではないところの、たとへただ一時的にでも清められた師弟の情の、美しい自然の姿でありました。遂に先生の姿はゆるやかに動き出して、やがて私達の視力を遙に運び去られました。

私達はかへりは三等で歸る豫定だつたのです。それだのに先生があれだけのお金を驛員に渡してしまつた事に就ては、私達の幼稚な頭でどう所置する事も出來ませんでした。二等に乘つて歸りたくもあるし、又さうするのは勿體ないやうな氣もするのでした。するうちに例の助役がにこにこしながら私達の所にやつて來て、何かと話しかけはじめました。さうして私達が先生に就ていろいろな話をすると、

『いゝ先生ですね、いゝ先生ですね。』といつて私達を喜ばせながら微笑んで聞いてゐました。すぐ次の列車と言つても、その時分はまだ今程往復が頻繁でなかつたので、どうしても燈がついてからでなければ汽車が來ないといふのでした。

二時間あまり待つたあとで、漸く私達の乘るべき下り列車が入つて來ました。私達は例の助役が扉を開けてくれた二等室へとぞろぞろ乘り込みました。その車室もやはり來る時のと同じ位の狹さ

で、ぽつかりと靜にともつてゐる電燈の下に、やわらかさうな赤い腰掛が室の周圍に並んでゐました。その片隅に一人の紳士がたゞ一人腰掛けてゐて、私達が後から後からと入つて來るのを、びつくりしたやうな顏を上げて一人一人見迎へました。

先を爭ふ友達をやり過して、一番最後に車室に入つた私は、最早ぎつちりと詰め切つた腰掛に空席がなく、たゞ膝掛を敷いてゐる紳士の傍に僅な空席を見出すばかりでしたが、さすがにそこには行きかねて一寸躊躇しました。それを氣の毒がつた友達が、もつとぎしぎしつめ合つて一人前の席を作らうと動き出した時、

『あなた、こゝにお出なさい。』と、その紳士が私を傍にさし招ぐのでした。

私はためらひながらも、そこに行つて窮屈さうに――席は十分ゆつくりしてゐたのだけれど――腰掛けました。

紳士はいかにもいゝをぢさんと言つたやうな顏をした人で、この大勢な田舍娘達の同車を少しも迷惑がつてゐるやうな模樣もなく、寧ろ私達の方が、このたゞ一つの異分子に對して氣まづさうな視線を向け、何か物言ひたさうに微笑を含んでゐる口許をまじまじと眺めてゐるのでした。

『あなた方はどこの生徒ですか？』と、遂に紳士は口を開いて、私達全體に向つて問ひかけました。

私達は互に眼と眼を見合つて、きまりわるさうに笑み交したまゝ、誰一人としてその問に答へる者もありませんでした。

皆々の上を一巡しをはつた紳士の眸は、最後にすぐ傍なる私の上に落ちました。そしてその眼は報いられぬ輕い失望を浮べながらも、再び前の問を繰り返してゐるのでした。

『S――です。』

私は簡單に答へました。

『S――には女學校があるの？』

『いゝえ。』

『ぢや、あなた方は小學校の生徒ですか？』

『えゝ。』

『何年生？』

『高等二年です。』

紳士は徐に卷煙草の先に火をつけました。

『今日は遠足ですか。』

『いゝえ、先生を送つて來たんです。』
『先生を？』
かう言つて紳士はもう一度車内をぐるりと見廻しました。
『先生がどこかに轉任なすつたんですね？』
『いゝえ、臺灣にいつたんです。』
『臺灣に？　あなた方の先生が？』
紳士はわからぬといつたやうに、片手の爪を彈きました。
然しその時はもう大分皆々の氣分も解けてゐましたので、横合からぽつぽつ私の答を補ふ者も出て來ました。私達はまたこゝでも先刻助役に話したやうに、先生の話を得意になつて物語るのでした。
紳士は絶えず微笑を浮べて、うなづきながら聞いてゐました。そしてまた助役が言つたやうに、『いゝ先生ですね。』といふ言葉を私達が期待した時に、
『あなた方はいゝ先生を持つて幸福です。その先生の名は何て言ひますか？』などと問ふのでした。
暗い外を恐しく唸つてどんどん汽車は驅けてゐます。私達はまたいつの間にか唱ひ出しました。

殊に紳士が、その幼い聲の響を樂しむものゝやうに見えると、私達は猶更一所懸命になつて唱ふのでした。紳士は絶えず眼をつぶつて、口許に微笑を浮べながら、やかましさうな顔もせずに聞いてゐました。

『さあもうS——に近くなりましたね、お母さん達がさぞ待つてるでせう。私はこれからもつともつと夜どほし乘つて行かなければならないんです。もうあなた方にはどこで會はれるつてこともないんですね。みんな今のうちに一所懸命勉強なさい。今はあなた方の一番樂しい時で、二度と再び歸つては來ない時ですよ。よくお父さんお母さんの言ふ事をお聞きなさい。』

私達もにこにこしながら、おとなしくその紳士の言ふのを聞いてゐました。なぜかこのいゝをぢさんと別れるのがのこり惜しいやうな氣がしてならないのでした。

『ほらもう着きました。ぢやさやうなら！』

『左樣なら！』

『左樣なら！』

薄暗いプラツトフオームに、私達を迎へる家の者の提燈が三つ四つ動いてゐました。

あのよき紳士に、その後吾々の誰もがめぐり合ふ事はなかつたでせう。名も知らず、顔もさだか

に覺え知らぬ人ではあつたけれど、若木のやうな吾々の少女時代に、偶然とはいへ美しい温情を灌いで行つた人として、私はその後の半生の辛苦なるあゆみのひまひまには、かの二等室と、よき紳士との記臆をあらたにするのでした。

【入力者注】　以下の修正を行いました。

254-9 開かれた　→　聞かれた

258-1 ゐのゐるでした　→　ゐるのでした

258-6 生徒ですか？　→　生徒ですか？』

底本：「水野仙子集」
　大正九年五月卅一日発行
初出：「希望」大正五年四月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成三十年二月二十二日
リンク：水野仙子ホームページ